

## Parallel Narratology 試論 —ハイパーテキストにおける相互参照の観点から—

小林 龍生<sup>†</sup> 山口 琢<sup>‡</sup>

<sup>†</sup> ジャストシステムデジタル文化研究所 〒107-8540 東京都港区北青山 1-2-3

<sup>‡</sup> 株式会社ジャストシステム 〒107-8540 東京都港区北青山 1-2-3

E-mail: <sup>†</sup> tatsuo\_kobayashi@justsystem.co.jp <sup>‡</sup> taku\_yamaguchi@justsystem.co.jp

あらまし 複数の視点から同一事象を記述したドキュメントにタグを付加することにより、構造化し、対話的に操作することで、多様な読みの可能性を検討する。また、このための専用のシステムを開発する。

キーワード ハイパーテキスト, 平行物語, 共観福音書, 芥川龍之介, 藪の中, xfy

## An Essay for Parallel Narratology —New Generation of Hyper Text and Possibility of multi-dimensional Reading—

Tatsuo KOBAYASHI<sup>†</sup> and Taku Yamaguchi<sup>‡</sup>

<sup>†</sup> Justsystems Digital Culture Research Center 1-2-3 Kita-Aoyama Minato-ku Tokyo, 107-8640 Japan

<sup>‡</sup> JustSystems Corporation 1-2-3 Kita-Aoyama Minato-ku Tokyo, 107-8640 Japan

E-mail: <sup>†</sup> tatsuo\_kobayashi@justsystem.co.jp, <sup>‡</sup> taku\_yamatuchi@justsystem.co.jp

**Abstract** In the history of human literacy, there are many documents which include multiple view points. Difference between testimonies from prosecutor side and from defense side, difference between buyer's view point and seller's view point are a couple of examples.

Firstly, in this paper, the word "Parallel Narratology" will be defined.

Secondly, abstract structure and the precedential studies are discussed.

Lastly, an attempt to define data structure of the "Parallel Narratology" based on XML related standards of structured documentation, especially XHTML will be discussed.

The Synoptic Evangels and "Yabu no naka", a novel written by Ryunosuke AKUTAGAWA will be used as examples.

**Keyword** Hyper Text, Synoptic Evangels, Narratology, Akutagawa, xfy

### 1. 共観福音書と Parallel Narratology

#### 1.1. 共観福音書と電子聖書

古来、もっとも多く読者を持ち、もっとも広範に研究や言及がなされた書物が新約聖書であることに、異を差し挟むことはまことに困難なことであろう。

中でも、イエスの伝記的記述とされる四福音書は、西欧文明の歴史の中で、ありとあらゆる観点からの膨大な研究の蓄積がある。

このような研究史の中で、特に、マタイ、マルコ、ルカの三福音書は、共通する部分が多くあり、共観福音書(Synoptic Evangels)として、新約聖書学の研究史上でも、共際だって重要な位置を占めており、共観福音書の対応箇所を、さまざまな手法を用いて分析比較することにより、それぞれの福音書の成立過程や想定される対象読者層の特定などを行う研究が蓄積されている。

また、平行する箇所を横に並べて排列した対観表と呼ばれる表現形式は、グーテンベルクの活版印刷発明以前の写本時代からも広く行われており、現代に至っては、印刷技術の粋を尽くした編纂出版例も多くある。

一方、聖書のテキストをデジタル化して研究する試みも早くから行われている。日本においても、つとに1980年代後半から、当時の劣悪なソフトウェア、ハードウェア環境や著作権法上の制約などを乗り越えて、複数の篤志家による新共同訳聖書の電子テキスト化が平行して試みられていた。これらのテキストは、新共同訳聖書翻訳チームの一員でもあった Z・イエール神父の手に集められ、コンピューター上で比較照合することで、確度の高いテキストが作られていた。

筆者(小林)は、このテキストを基に、新共同訳に

記載されている平行個所をハイパーリンクとみなして、ハイパーテキスト化を試みたことがある。(文献[1])

以下は、その一部である。(記述方法は XHTML に改めてある)

新旧約聖書には、従来から章節番号が付されており、これらは、原典、翻訳の如何を問わず、一定である。これらの章節番号は、ハイパーリンクを張る際の絶対

アドレス (XHTML ではアンカー) として用いることができる。また、市販の刊行聖書には、共観福音書の平行個所が記載されていることが一般的であり、これらの平行個所に章節番号をアンカーとして機械的にハイパーリンクを張れば、見事に完結的なハイパーテキストシステムが完成する。

| マタイによる福音書  | マルコによる福音書   | ルカによる福音書  |
|--|---|---|
| <pre>&lt;div class="article" title="No174 ペトロの呑み"&gt; &lt;a href = "mark-14.html#14:66"&gt;マルコによる福音書 14 章 66 節~72 節&lt;/a&gt; &lt;a href = "luke-22.html#22:56"&gt;ルカによる福音書 22 章 56 節~62 節&lt;/a&gt; &lt;a name="26:69"&gt;26:69&lt;/a&gt; ペトロは外にいて中庭に座っていた。そこへ一人の女中が近寄って来て、「あなたもガリラヤのイエスと一緒にいた」と言った。 &lt;br/&gt; &lt;a name="26:70"&gt;26:70&lt;/a&gt; ペトロは皆の前でそれを打ち消して、「何のことを言っているのか、わたしには分からない」と言った。 &lt;br/&gt; &lt;a name="26:71"&gt;26:71&lt;/a&gt; ペトロが門の方に行くと、ほかの女中が彼に目を留め、居合わせた人々に、「この人はナザレのイエスと一緒にいました」と言った。 &lt;br/&gt; &lt;a name="26:72"&gt;26:72&lt;/a&gt; そこで、ペトロは再び、「そんな人は知らない」と誓って打ち消した。 &lt;br/&gt; &lt;a name="26:73"&gt;26:73&lt;/a&gt; しばらくして、そこにいた人々が近寄って来てペトロに言った。「確かに、お前もあの連中の仲間だ。言葉遣いでそれが分かる。」 &lt;br/&gt; &lt;a name="26:74"&gt;26:74&lt;/a&gt; そのとき、ペトロは呪いの言葉さえ口にしながら、「そんな人は知らない」と誓い始めた。するとすぐ、鶏が鳴いた。 &lt;br/&gt; &lt;a name="26:75"&gt;26:75&lt;/a&gt; ペトロは、「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われたイエスの言葉を思い出した。そして外に出て、激しく泣いた。 &lt;/div&gt;</pre> | <pre>&lt;div class="article" title="No174 ペトロの呑み"&gt; &lt;a href = "matthew-26.html#26:75"&gt;マタイによる福音書 26 章 69 節~75 節&lt;/a&gt; &lt;a href = "luke-22.html#22:56"&gt;ルカによる福音書 22 章 56 節~62 節&lt;/a&gt; &lt;a name="14:66"&gt;14:66&lt;/a&gt; ペトロが下の中庭にいたとき、大祭司に仕える女中の一人が来て、 &lt;br/&gt; &lt;a name="14:67"&gt;14:67&lt;/a&gt; ペトロが火にあたって目にするのを目にすると、じっと見つめて言った。「あなたも、あのナザレのイエスと一緒にいた。」 &lt;br/&gt; &lt;a name="14:68"&gt;14:68&lt;/a&gt; しかし、ペトロは打ち消して、「あなたが何のことを言っているのか、わたしには分からないし、見当もつかない」と言った。そして、出口の方へ出て行くと、鶏が鳴いた。 &lt;br/&gt; &lt;a name="14:69"&gt;14:69&lt;/a&gt; 女中はペトロを見て、周りの人々に、「この人は、あの人たちの仲間です」とまた言いだした。 &lt;br/&gt; &lt;a name="14:70"&gt;14:70&lt;/a&gt; ペトロは、再び打ち消した。しばらくして、今度は、居合わせた人々がペトロに言った。「確かに、お前はあの連中の仲間だ。ガリラヤの者だから。」 &lt;br/&gt; &lt;a name="14:71"&gt;14:71&lt;/a&gt; すると、ペトロは呪いの言葉さえ口にしながら、「あなたがたの言っているそんな人は知らない」と誓い始めた。 &lt;br/&gt; &lt;a name="14:72"&gt;14:72&lt;/a&gt; するとすぐ、鶏が再び鳴いた。ペトロは、「鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」とイエスが言われた言葉を思い出して、いきなり泣きだした。 &lt;/div&gt;</pre> | <pre>&lt;div class="article" title="No174 ペトロの呑み"&gt; &lt;a href = "mark-14.html#14:66"&gt;マルコによる福音書 14 章 66 節~72 節&lt;/a&gt; &lt;a href = "matthew-26.html#26:75"&gt;マタイによる福音書 26 章 69 節~75 節&lt;/a&gt; &lt;a name="22:56"&gt;22:56&lt;/a&gt; するとある女中が、ペトロがたき火に照らされて座っているのを目にして、じっと見つめ、「この人も一緒にいました」と言った。 &lt;br/&gt; &lt;a name="22:57"&gt;22:57&lt;/a&gt; しかし、ペトロはそれを打ち消して、「わたしはあの人を知らない」と言った。 &lt;br/&gt; &lt;a name="22:58"&gt;22:58&lt;/a&gt; 少したつてから、ほかの人がペトロを見て、「お前もあの連中の仲間だ」と言うと、ペトロは、「いや、そうではない」と言った。 &lt;br/&gt; &lt;a name="22:59"&gt;22:59&lt;/a&gt; 一時間ほどたつと、また別の人が、「確かにこの人も一緒だった。ガリラヤの者だから」と言い張った。 &lt;br/&gt; &lt;a name="22:60"&gt;22:60&lt;/a&gt; だが、ペトロは、「あなたの言うことは分からない」と言った。まだこう言い終わらないうちに、突然鶏が鳴いた。 &lt;br/&gt; &lt;a name="22:61"&gt;22:61&lt;/a&gt; 主は振り向いてペトロを見つめられた。ペトロは、「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われた主の言葉を思い出した。 &lt;br/&gt; &lt;a name="22:62"&gt;22:62&lt;/a&gt; そして外に出て、激しく泣いた。 &lt;/div&gt;</pre> |

現在では、新共同訳の電子テキストは、日本コンピュータ聖書研究会 (<http://jcbp.gospeljapan.com/>) などから容易に入手することが可能である。(今回用いた電子テキストもこれに基づく)

## 1.2. Parallel Narratology とは

本稿では、共観福音書のように、一つの事象を異なる複数の視点から記述したドキュメントを、時系列的に対応する個所を動的に表示、参照することにより、物語をいわば三次元的に読み解く可能性を検討する。

また、対観表を電子テキスト化する試み(文献[2])や電子テキストを機械的に処理して共観福音書の成立過程を検証する試み(文献[3])なども行われている。

このような、一つの事象を異なる複数の視点から記述した《物語》一般を、Parallel Narratives と呼ぶこととする。また、この Parallel Narratives を対象とした研究全般を、Parallel Narratology と呼ぶこととする。

検討の素材としては、議論をより一般化するため、共観福音書ではなく、芥川龍之介の小説『藪の中』

を用いる。(電子テキストは青空文庫による)

## 2. Narratives, Hyper Text, Parallel Narratives

ハイパーテキストが出現した当時、書くという行為と読むという行為の主体のあり方についてのさまざまな議論があった。

この議論の結論を簡単にまとめると、以下のようになる。

従来の文書は書き手によってあらかじめシリアルライズされたテキストであり、さまざまな要素をシリアルライズする行為そのものが書くという行為の本質である

一方、ハイパーテキストは、さまざまな要素(ノード)が有向グラフ(リンク)で結合されたものではあるが、その閲覧順序には大きな自由度があり、どのような順序で閲覧するかは読者の主体性にゆだねられている。この閲覧順序(シリアルライズの順序)こそが、読むという行為の本質であり、それは、従

来、一方的に書き手に委ねられていた書くという行為を読み手の側に解き放つことでもあった。

しかし、急速なインターネットの普及に伴い、莫大なノードとリンクの蓄積は、情報エントロピーの爆発的な増大を招き、その情報の海から、意味ある物語を紡ぎ出すことを非常に困難なものとしてしまった。

現在は、SNSやブログなど、ノードとリンクの範囲をある程度限定することにより、情報エントロピーの増大を相対的に押さえ込む試みがなされている時期といえることができる。

こうした状況の中で、Parallel Naratologyの試みは、ある一定の観点からノード間に共通の補助線を引くことにより、一定の幅の中で読み手の自由な判断を助ける試みである。

## 3. 『藪の中』の脱構築

『藪の中』は、今昔物語に想を得た芥川龍之介の短編小説である。七人の登場人物が、それぞれ異なった視点から、一つの殺人事件の経緯を語っている。中でも、犯人と目される男(多襄丸)、被害者の妻、被害者の壺の証言は、それぞれ食い違っており、その真相はまさに《藪の中》である。

この芥川のテキストをXHTMLのタグを付加することにより、より小さな単位に分解し、動的にさまざまな形に並べ替え、読者のより主体的な《読み》を支援するシステムを開発することが、本稿における当面の目標となる。

本システムでは、各セグメント(XHTMLの<div class="article">で区切られた範囲)を、二次元の表構造に自由に置き換えることができる。この操作により、時系列を縦軸として、同じ時間帯での発言と思われる部分を並列的に閲覧することが容易となる。紙幅の関係で、操作の過程および結果の全体像は、口頭発表でのデモに委ねざるをえず、また、情報処理技術を対象とする本研究会での発表の範囲を逸脱するので、物語の内容解釈に踏み込むことはしないが、物語の構造に係わる部分に絞って、捜査の結果えられた知見を述べる。

## 4. 今昔物語との比較における芥川の創意

芥川が「今昔物語集巻二十九第二十三『具妻行丹波国男於大江山被縛』より妻と伴い丹波の国へ行く男が大江山で縛られる話」から想を得たことは、つとに知られている。しかし、今昔物語と芥川作品とは、物語の大筋では一致しているが、結末の一部とその後の心理的描写については、大幅に相違している。

今昔物語と対応がとれるのは、芥川作品では、大部

分が多襄丸(たじょうまる)の白状の部分のみである。芥川は、今昔物語の結末(男は殺されない)を男が死体で発見されたことに変更し、その上で、その男の死に至る次第を藪の中の出来事として、複数の語り手に語らせているのである。ここに、芥川の創意があることは、物語の内容に踏み込むまでもなく物語の構造をみるだけでも明白である。

|   |  |
|---|--|
| 多襄丸の白状  | 今昔物語集巻二十九第二十三「具妻行丹波国男於大江山被縛」より妻と伴い丹波の国へ行く男が大江山で縛られる話<br>高木 健 現代語訳  |
| わたしはあの夫婦と途(みち)づれになると、向うの山には古塚(ふるづか)がある、この古塚を発(あば)いて見たら、鎧や太刀(たち)が沢山出た、わたしは誰も知らないように、山の陰の藪(やぶ)の中へ、そう云う物を埋(うず)めてある、もし望み手があるならば、どれでも安い値に売り渡したい、——と云う話をしたのです。男はいつかわたしの | 今は昔のこと、京に住んでいたある男の妻が丹波の国に生まれであったので、男は、妻を伴い、丹波の国へ行くため、妻を馬に乗せ、夫は箭を十本ほど刺した竹の籠を背負い、弓を手に持って後ろから歩いていると、大江山のあたりで太刀を帯びた屈強な若い男と道連れになった。<br>しばらく連れだつて歩きながらお互いに話をし、どちらに |

|  |   |
|--|---|
| <p>話に、だんだん心を動かし始めました。それから、——どうです。欲と云うものは恐ろしいではありませんか？ それから半時（はんとし）もたない内に、あの夫婦はわたしと一緒に、山路（やまみち）へ馬を向けていたのです。</p>   | <p>行かれますか、などと親しく語りあいながら歩いていると、この今道連れになった太刀を帯びた男が、自分が帯びているこの太刀は、陸奥の国より伝わってきた名高い太刀である、見給え、と言いつつ、太刀を抜いたのを見ると、実にすばらしい太刀だったので、始めの男は、どうしてもその太刀が欲しくなった。若い男は、その様子を見て、この太刀が必要でしたらお持ちのその弓と交換しましょう、と言った。弓を持った男は、持っている弓はたいしたものではなく、あの太刀は実にすばらしいものであったので、太刀が欲しかった上にひと儲けができるとも思い、ためらわず交換した。しばらく行ったところで、若い男が言うには、弓しか持っていないのは人目にもおかしい、山を歩いている間、その矢を二本ほど貸してください、ご一緒するのですから、私がお持ちしても同じことでしょう、と。男は、これを聞いて、いかにもと思ひ、また、よい太刀をみすばらしい弓と交換したのいうられて、言われるがままに矢を二本抜いて渡した。そして、若い男は、弓と矢二本を手を持ち、後ろからついて行く。はじめの男は、腹を背負い、太刀を帯びて歩いていった。</p> |
| <p>わたしは藪（やぶ）の前へ来ると、宝はこの中に埋めてある、見に来てくれと云いました。男は欲に渴（かわ）いていますから、異存（いぞん）のある筈はありません。が、女は馬も下りずに、待っていると云うのです。またあの藪の茂っているのを見ては、そう云うのも無理はありますまい。わたしはこれも突を云えば、思う壺（つぼ）にはまったのですから、女一人を残したまま、男と藪の中へはいりました。</p>  |   |
| <p>藪はしばらくの間（あいだ）は竹ばかりです。が、半町（はんちょう）ほど行った処に、やや開いた杉むらがある、——わたしの仕事を仕遂げるのには、これほど都合（つごう）の好（い）い場所はありません。わたしは藪を押し分けながら、宝は杉の下に埋めてあると、もっともらしい嘘をつきました。男はわたしに そう云われると、もう瘦（や）せ杉が透いて見える方へ、一生懸命に進んで行きます。その内に竹が疎（まば）らになると、何本も杉が並んでいる、——わたしはそこへ来るが早いか、いきなり相手を組み伏せました。男も太刀を佩（は）いているだけに、力は相当にあったようですが、不意を打たれてはたまりません。たちまち一本の杉の根がたへ、括（くく）りつけられてしまいました。縄（なわ）ですか？ 縄は盗人（ぬすびと）の有難さに、いつ壱を越えるかわかりませんから、ちゃんと腰につけていたのです。勿論声を出させないためにも、竹の落葉を頻張（ほおば）らせれば、ほかに面倒はありません。</p>   | <p>藪はしばらくの間（あいだ）は竹ばかりです。が、半町（はんちょう）ほど行った処に、やや開いた杉むらがある、——わたしの仕事を仕遂げるのには、これほど都合（つごう）の好（い）い場所はありません。わたしは藪を押し分けながら、宝は杉の下に埋めてあると、もっともらしい嘘をつきました。男はわたしに そう云われると、もう瘦（や）せ杉が透いて見える方へ、一生懸命に進んで行きます。その内に竹が疎（まば）らになると、何本も杉が並んでいる、——わたしはそこへ来るが早いか、いきなり相手を組み伏せました。男も太刀を佩（は）いているだけに、力は相当にあったようですが、不意を打たれてはたまりません。たちまち一本の杉の根がたへ、括（くく）りつけられてしまいました。縄（なわ）ですか？ 縄は盗人（ぬすびと）の有難さに、いつ壱を越えるかわかりませんから、ちゃんと腰につけていたのです。勿論声を出させないためにも、竹の落葉を頻張（ほおば）らせれば、ほかに面倒はありません。</p>  |
| <p>わたしは男を片附けてしまうと、今度はまた女の所へ、男が急病を起したらしいから、見に来てくれと云いに行きました。これも凶星（ずぼし）に当たったのは、申し上げるまでもありますまい。女は市女笠（いちめがさ）を脱いだまま、わたしに手をとられながら、藪の奥へはいつて来ました。ところがそこへ来て見ると、男は杉の根に縛（しば）られている、——女はそれを一目見るなり、いつのまに懐（ふところ）から出していたか、きらりと小刀（さすが）を引き抜きました。わたしはまだ今までに、あのくらい気性の烈（はげ）しい女は、一人も見つかりません。もしその時でも油断していたらば、一突きに脾腹（ひばら）を突かれたでしょう。いや、それは身を躲（かわ）したところが、無二無三（むにむざん）に斬り立てられる内には、どんな怪我（けが）も仕兼ねなかったのです。が、わたしも多虱丸（たじょうまる）ですから、どうにかこうにか太刀も抜かず、とうとう小刀（さすが）を打ち落しました。いくら気の勝った女でも、得物がなければ仕方がありません。わたしはどうとも思い通り、男の命は取らずとも、女を手に入れる事は出来たのです。</p> | <p>そして、女に近寄って見ると、二十歳過ぎて、身分は賤しいけれど魅力がありたいそう美しかった。男は、女に心を奪われ、ほかに何も考えられなくなったので、女の衣を脱がそうとすると、女は拒むことができそうにないと思ひ、言われるがままに衣を脱いだ。そして、男も着物を脱ぎ、女を押し倒して交わった。女はしかたがなく、若い男に言われるがままに男が縛り付けられている様子を見たが、その時見られた男はどのような気になったのだろうか。</p>   |

### 5. 視線の誤解

芥川作品を小さな単位(セグメント)に区切って、さまざまに操作してみると、一つの事象について、

複数の視点からの記述がある部分は、案外少ないことも、容易に明白となる。

| 多襄丸   | 女  | 死盃   |
|---|--|--|
| <p>男の命は取らずとも、——そうです。わたしはその上にも、男を殺すつもりはなかったのです。所が泣き伏した女を後(あと)に、藪の外へ逃げようとする、女は突然わたしの腕へ、気遣いのように縋(すが)りつきました。しかも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥(はじ)を見せるのは、死ぬよりもつらいと云うのです。いや、その内どちらにしろ、生き残った男につれ添いたい、——そうも喘(あえ)ぎ喘(あえ)ぎ云うのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい気になりました。(陰鬱なる興奮)</p> <p>こんな事を申し上げると、きっとわたしはあなた方より残酷(ざんこく)な人間に見えるでしょう。しかしそれはあなた方が、あの女の顔を見ないからです。</p> | <p>その紺(こん)の水干(すいかん)を着た男は、わたしを手ごめにしてしまうと、縛られた夫を眺めながら、嘲(あざけ)るように笑いました。夫はどんなに無念だったでしょう。が、いくら身悶(みもだ)えをしても、体中(からだじゅう)にかかった縄目(なわめ)は、一層(いちじょう)ひしひしと食い入るだけです。わたしは思わず夫の側へ、転(ころ)ぶように走り寄りました。いえ、走り寄ろうとしたのです。しかし男は咄嗟(とっさ)の間(あいだ)に、わたしをそこへ蹴倒(けうたう)しました。ちょうどその途端(とたん)です。</p> | <p>盗人(ぬすびと)は妻を手ごめにすると、そこへ腰を下したまま、いろいろ妻を慰め出した。おれは勿論口は利(き)けない。体も杉の根に縛(しば)られている。</p>  |
| <p>殊(こと)にその一瞬間(いつしゅん)の、燃えるような瞳(ひとみ)を見ないからです。わたしは女と眼を合せた時、たとい神鳴(かみなり)に打ち殺されても、この女を妻にしたいと思いました。</p>   | <p>わたしは夫の眼の中に、何とも云いようのない輝(かがや)きが、宿(よ)っているのを覚(さと)りました。何とも云いようのない、——わたしはあの眼を思い出すと、今でも身震(みぶる)いが出ずにはられません。口さえ一言(いちごん)も利(き)けない夫は、その刹那(せつな)の眼の中に、一切の心を伝えたのです。しかしそこに閃(ひらめ)いていたのは、怒りでもなければ悲しみでもない、——ただわたしを蔑(さげす)んだ、冷たい光(ひかり)はありましたか？</p>                               | <p>が、おれはその間(あいだ)に、何度も妻へ目くばせをした。この男の云う事を真(ま)に受けるな、何を云っても嘘(うそ)と思え、——おれはそんな意味を伝えたいと思った。しかし妻は惘然(しょうぜん)と笹(さ)の落葉(らくえつ)に坐(ま)ったなり、じっと膝(ひざ)へ目をやっている。</p>  |
| <p>妻にしたい、——わたしの念頭(ねんとう)にあったのは、ただこう云う一事(ひとこと)だけです。これはあなた方の思うように、卑(いや)しい色欲(しよく)ではありません。もしその時色欲(しよく)のほか、何も望(ねが)みがなかったとすれば、わたしは女を蹴倒(けたお)しても、きっと逃(に)げてしまったでしょう。男もそうすればわたしの太刀(たち)に、血(ち)を塗(ぬ)る事にはならなかったのです。が、薄暗(うすぐら)い藪(やぶ)の中に、じっと女の顔を見た刹那(せつな)、わたしは男を殺さない限り、ここは去(さ)るまいと覚悟(かくご)しました。</p>   | <p>わたしは男に蹴(け)られたよりも、その眼の色に打(う)たれたように、我(わ)知らず何か叫(こ)んだぎり、とうとう氣(き)を失(う)ってしまいました。</p>  | <p>それがどうも盗人の言葉に、聞き入っているように見えるではないか？ おれは妬(ねたま)しきに身悶(みもだ)えをした。が、盗人はそれからそれへと、巧妙(くわうめう)に語(かた)を進(すす)めている。一度(いちど)でも肌身(みみ)を汚(よ)したとなれば、夫との仲(な)も折(を)り合(あ)うまい。そんな夫(つま)に連れ添(よ)っているより、自分の妻(つま)になる気(き)はないか？ 自分(おれ)はいいと思えばこそ、大それた真似(まね)も働(はたら)いたのだ、——盗人はとうとう大胆(だいたん)にも、そう云う語(かた)さえ持ち出した。</p> <p>盗人にこう云われると、妻はうっとり顔(かほ)を擡(もた)げた。おれはまだあの時(とき)ほど、美しい妻(つま)を見た事(こと)がない。しかしその美しい妻(つま)は、現在(いま)縛(しば)られたおれを前に、何(なに)と盗人(ぬすびと)に返(かへ)事(こと)をしたか？ おれは中有(ちゅうう)に迷(まよ)っていても、妻(つま)の返(かへ)事を思(おも)い出すごとに、嗔(しん)念(ねん)に燃(も)えなかつたため(ため)にはない。妻(つま)は確(たしか)にこう云(い)った、——「ではどこへでもつれて行って下さい。」(長(なが)き沈(しん)黙(もく))</p> |

なかでも、女が犯された直後の三人三様の視線描写は、本芥川作品の焦点ともいえる部分であり、他者の視線をそれぞれがどう解釈するかが、その後の物語の展開の相違を引き起こす結節点となっている。

おそらくは、本作品の読者は、シリアルな《読み》の際にも、この視線の相違に強く印象づけられ、そ

## 6. 本システムおよびデータ構造

本システム的设计にあたっての考慮点を簡単に紹

の印象を核としてそれぞれの《読み》を深めていくことと思われるが、このような文学理解のプロセスが、本システムのいわば外在化された《読み》の操作により、システムの対話的操作によって半ば自動的に導かれることが理解できよう。

介する。

## 6.1. XHTML との相互運用性

データ記述には XHTML を採用した。XHTML を採用する理由は、構造を記述する記法であるとともに、広く流通する電子テキストフォーマットだからである。

文書データ記述に XHTML を採用することにより、XHTML 準拠のモダンブラウザでも本稿の内容をある程度は追跡できるよう配慮した。もちろん、本システム固有の操作や表現は損なわれるが。

XHTML では規定されない、本システム固有の情報、XHTML の class 属性によって要素に付加することにした。これは XHTML にあらかじめ織り込まれた XHTML 準拠の方法であり、Microformats でも採用されている方法である。

## 6.2. システム構成

そのうえで、本システムは大きく 2 つのシステムに分けることにした。マーカーシステムとリーダーシステムである。

マーカーシステムは『藪の中』読み解きツールである。XHTML 文書にセグメンテーションや読み解く軸をインタラクティブに設定し、ダイナミックに並べ替えを実行するシステムである。

リーダーシステムは、ハイパーテキスト『共観福音書』の平行リーダーである。XHTML のリンクで表現された平行物語を、実際に 2 次元の表として平行表示するツールである。

## 7. 結びに代えて：Parallel Narratology から新たな《読み》の可能性へ

本稿では、シリアルに記述された『藪の中』という一つの物語をセグメントに分解し、それぞれのセグメントを時間軸に沿って並列も含めて自由に配置し直す作業を動的に行うことにより、読者のさまざまな《読み》の行為を支援する可能性を示した。

当然ながら、このような《読み》の行為は、単に物語には限定されず、ニュース等で語られる事象についても、ビジネスの現場における、売り手側と買い手側、自社と競合他社との比較、その他、立場が異なったり、利害が対立するさまざまな視点からの事象の描写に適用することも容易である。インターネット上のニュースサイトの記事やブログサイトの記事を素材として用いた Parallel Narratology の構築も大きな可能性がある。

## 6.3. アーティクルと系列

本システムでは、閲覧（シリアライズ）あるいは並行表示など、並べ替えの最小単位であるセグメントをアーティクルと呼び、div 要素などでくくって、class 属性を指定し、その値を"article"とすることで示すことにした。リーダーシステムでは、アーティクル間の関係が XHTML のリンクを用いて記述されていると解釈する。

a 要素(anchor 要素)の name 属性または id 属性による XHTML のリンクはアンカー、すなわち錨による頭出しリンクである。それは対応するアーティクル同士をつなぎとめるための錨であって、船本体、すなわちアーティクル本体ではない。アーティクルとアンカーを区別することにより、アーティクル中に複数のアンカーを設置することができ、1 つのアーティクルに複数のリンクを設定できる。

そのうえで、あるリンクのアンカーの id が \$ID であるとき、そのアンカーでリンクされているアーティクル本体は、次の XPath 式で求められる：

```
id($ID)/ancestor-or-self::xhtml:*[contains(concat(' ', @class, ' '), ' article ')]
```

ここで「xhtml」は XHTML の名前空間接頭辞である。

このようにして、リーダーシステムでは、XHTML のリンク構造をもとに、アーティクルの平行表示を実現している。

また、本稿では、主として時系列での異なる視点からの平行物語を取り上げたが、本システムは、時系列にかぎらず、さまざまな座標軸（キーワード）を切り口として、物語を立体的に構築することも可能性となっている。

共観福音書は、イエスの生涯につき、異なる視点からの一見相矛盾する物語を提供することにより、一人一人の読者のさまざまな《読み》の可能性を提供し続けてきた。このことにより、おそらくは単一の視点からの物語ではなしえなかった豊穡な《読み》の歴史を積み重ねてきた。このような知的遺産を、方法論的に支援し、未来の豊かな《読み》の歴史への道を拓くことも、情報通信技術に課せられた重要な責務の一つであろう。

## 文 献

- [1] 『季刊哲学 12 号』《電子聖書：ハイパーバイブル=テキストの新スペキエス》, 1991 年 10 月
- [2] 佐藤 研 “ギリシャ語福音書彩色共観表”, <http://www.rikkyo.ne.jp/~msato/GrSynIntroJp.pdf>
- [3] 三宅真紀他 “因子分析による共観福音書問題の解析”, 統計数理 vol48, no2, 2000